オフィシャルな交流会で、総研大の専攻を紹介しているところ。左列が総研大生、右列が UST 学生。

ハ・テフンさん
HaTaeHoon
UST で医学物理学を専攻
学生会では広報・渉外を担当

われは草の根的に直接学部生に働きかけようとしている」。

総研大には約半分の専攻に院生会があるが、全学を横断する組織はない。両大学の交流事業における学生受け入れの中心となった国立天文台の有本信雄教授は、「こうした学生の自主性は、総研大とは大きな違いで、開学の初期エネルギーが持続しているようだ。われわれも学ぶところは多い」と賞賛する。

UST学生には経済的サポート

ハさんは他大学も受験したが、将来政府機関で働きたいとの希望があり、大型の研究に取り組みたいと考えていた。UST での研究は、理論に加えて、研究フィールドを重視していることは魅力だった。さらに、決め手になったのは、UST の学生には経済的にサポートがあることだ。授業料が免除されるのではなく、所属機関によって学生に給与が支給され、そこから授業料を支払うという仕組みだという。韓国でも修士号や博士号を取った学生の就職は厳しいため、近年は大学院進学者は減少しているが、こうした効果もあって UST の志望者は増えている。学位取得者が出始めてまだ２年しか経っていないが、その大半は日本やアメリカでポスドクをしているという。

韓国の男子学生は、一般に学部時代に兵役に服すため、学業の中断という大きな試練を味わうことになる。ハさんは大学時代、２年２カ月大学を休学して、兵役に就いた。特に科学技術の分野では日進月歩の領域も多く、復学後はまた１から学び直さなくてはいけない。学問的に最も知識欲が旺盛なときに研究を中断されることも厳しいハンディだ。しかしハさんは、「理系の学生は、他の国の同年齢の学生に比べて 4~5 年の遅れがあると感じる。その分、プライドや情熱が強まり、忍耐強さも身についている」と力強く語った。

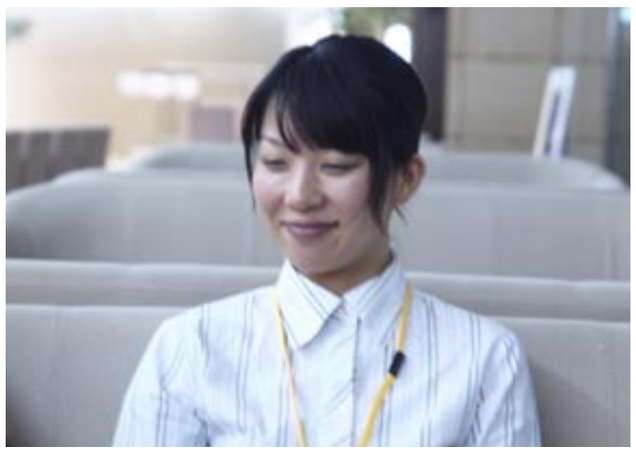
UST は現在、新しい本部ビルを建築中であり、2010 年に落成するのを記念して、総研大と合同で、記念の国際シンポジウムを開催することも計画されている。交流はさらに深まるものと予想される。

松本さんは、UST の学生の一体感に大いに触発された。「総研大でも、他専攻の学生との間で連携を取るため、まず、ブログなどのコミュニケーションツールを作ることを計画している」と語る。それが学生会の下地となり、対外的な交流の窓口へと育っていくことが期待される。

最も近い隣国は、最良のパートナーであると同時に最大のライバルでもある。両国の天文台が、お互いの電波望遠鏡をセットにして干渉計として活用しているように、適度に遠くて近しい関係にある。「同じ領域では切磋琢磨して成果を競い合うが、研究室を一歩出れば敵も味方もない。ノーサイドです」

（取材・構成　塚﨑朝子）

大田では、UST の基盤である KASI（天文科学専攻）を見学した。入り口には 1993 年万博のマスコットが飾られている（左の写真）。右の写真は衛星搭載カメラの説明を受けているところ。



松本尚子さん
Naoko Matsumoto
総研大・天文科学専攻

パネルディスカッション
総研大生が望むネットワーク、修了生が望むネットワーク

国際シンポジウムの最終日、総研大修了生、在学生が総研大学術ネットワークの構築に何を求めているのか、パネルディスカッションの形で意見交換が行われた。パネリストとして立ったのは、修了生のソルヴァン（加藤）比呂子さん（オスロ大学病院、統計科学専攻）と中島秀樹さん（タイの放射光研究機関、物質構造科学専攻）が、在学生のアバイ・ディシュパンデ（Abhay Deshpande、加速器科学専攻）さんと総研大・広報担当助教の眞山聡さん（天文科学専攻）であった。

修了生2人はともに海外で職を得ている。ソルヴァンさんは、自分のもっている学術ネットワークを広げていくことは、キャリアパス開拓の強力な戦略となると述べた。現在のポストも、自らが構築した国際的ネットワークを通して獲得したという。中島さんは自分が進めている研究プロジェクトを紹介し、社会との接点をどのように求めていくべきか、社会とどう向き合えばいいのか、社会との間をつなぐネットワークの構築について問題提起を行った。

また、インドからの留学生であるアバイさんは、国際的な修了生ネットワークの構築を呼びかけた。修了生ネットワークを確立すれば、各国に散らばる修了生が総研大生を受け入れたり、総研大に自分の学生を送り込むことによって、総研大の国際的学術ネットワークの構築につながる。大学が組織的にネットワーク構築をバックアップしてくれるのであれば、心強いと語った。

総研大では現在、修了生ネットワークの構築に着手している。眞山聡さんはその仕事に取り組んでおり、今回の国際シンポジウムの実施委員を務めた。眞山さんは、「修了生にとって、総研大は巨大な学術ネットワークのハブのようなもの。総研大にはこれまでOB・OG会のような組織がなく、修了生と大学の間の公式的なつながりがなかった。学生から大学への要望を伝える組織もなかった。今後は、在学生と修了生がいっしょになってネットワークを構築していくべきであろう」と提案した。

フロアからは、オンライン上で利用できる、ソーシャルネットワークサービスや掲示板などを利用して修了生ネットワークを構築すべきだという意見や、修了生・在学生・教員が共通で利用できる総研大のメールアカウントを作ってはどうかという提案があった。また、対面での交流の重要性についても議論された。その中で、セミナーのような公式的な会合だけでなく、ゆるやかな活動の中で結びつきを深めていくとことが望ましいという提案に拍手があがった。

今回のパネルディスカッションを通して感じられたのは、トップダウンでネットワークのハードだけを構築するのではなく、一人ひとりが草の根で輪を広げていくことの大切さであった。

（執筆　奥本素子）

「ICT を利用した在学生・修了生ネットワークの構築」を提案する藤原一毅さん (情報学専攻)。